

EU各国セミナー「ベルギーの魅力語る」

日時：平成19年 9月25日(火)

場所：イーグレひめじ 3F あいめっせホール

【講演内容】

《講師》 前駐ベルギー大使 内藤 昌平 氏

昨年の10月まで、ほぼ3年間ベルギーで大使をしておりまして、大変楽しい3年間を過ごすことができました。今日は「ベルギーの魅力語る」ということで、魅力、それはどうしても私の個人的な、主観的なことではありますが、やはり私が3年間いたのは日本の代表としていたわけですから、そういう意味で日本の国民の皆様にも、感じたことを一緒に感じていただけたらと私自身は思っております。

今朝、東京を発つときに読売新聞を手にししました。皆様もご覧かもしれませんが、大きな記事でベルギー分裂騒ぎの記事がありました。このことについてまずご説明しておかないと、これから1時間、私がベルギー、ベルギーと何回申し上げても、「さて、そのベルギーが分裂してしまったらどうなるの。」という疑問が皆さん1時間ずっと持っておられて、私のお話もうわの空になってもいけませんので、どうしてもこの問題の背景をまずご説明しておきたいと思っております。

記事にもオランダ語圏とフランス語圏の対立ということが書いてありますが、ベルギーは実はずっと連立政権ということで政府ができていまして、キリスト教民主党、それから自由党、さらには社会党という3大政党があります。これは南北共通なんですね。ところが、だんだんと南北問題というのが強くなってしましまして、この三つの政党それぞれ南北に分かれました。六つの政党。しかも選挙があると、例えば今回の選挙では北のフランドル、英語ではフランダースという、フランダースの犬というお話が有名ですが、そのフランドルではキリスト教民主党が第一党なんです。しかし、南の方はキリスト教民主党ではなくて自由党が第一党になる。だから南北でねじれ現象が起きておりまして、そこで連立の交渉をしなければならないということで時間がかかってくる。既に100日超えてまとまっていないということで、この新聞もベルギーのことをこれだけ大きく取り上げるまでになったわけです。実はこの問題はベルギーが建国、今年で177年目になりますけれども、以来ずっと抱えながら今日まできているということで避けて通れない

わけで、またその問題を抱えながらもこの国をまとめているというところにベルギーのベルギーらしさがあるわけです。

現に100日を超えたとしても初めてのことでないんです。20年ほど前には足かけ6カ月もかけて内閣の連立の交渉をしていました。新聞には無政府状態であると。しかしそんなこともないわけで、前の内閣がずっと仕事をしているわけですからその点は心配なく、次の連立の内閣をつくるための交渉をしているのです。我が国では自由民主党と公明党が連立内閣をつくっている。しかしベルギーは選挙のたびにねじれ現象が起きているものですから、しかも集まって連立内閣ということですね、二つだけではないですから。レインボー内閣、虹の七色、7つの政党を合わせて連立をする。従いまして、この連立の交渉というのが非常に細かいところまで決めていかないと内閣ができないというところで時間がかかっているわけです。

この南北の対立というのは税金の分配の問題が水面下に重なっているものですから根が深い。しかもお金が絡んでいるということでいろいろな問題がございます。しかし、これまでもベルギーはこの問題を乗り越えてやってきたということで、我々はこれからまだかかるかとは思いますが、あと1カ月ちょっとくらいかかるんじゃないかという見方はありますが、その間まさしくベルギーの政治家の知恵と、それから協調性といいますか、それが試されるという意味で、これからこの新聞記事をきっかけにして、皆様がベルギーの組閣の進み方について討論していただければ、またおもしろさも沸いてくるかなと思います。

ベルギーはそういう問題を抱えています。しかし、このベルギーという土地の上に立派な文化があるということをベルギー政府は常に海外に発信したいと思っております。

その、よい機会が2年前の愛知万博でした。この愛知万博でベルギーをどういう感じでアピールしようかということをベルギー政府は考えました。その構想を当時、と言っても2年前ですけれども、ベルギーでは実は日本の漫画に似た劇画というのが非常に伝統的に人気があるんですが、その第一人者のスクイテンさんという方に、ベルギーのことを愛知万博でどういうふうに応じるかよろしくお願ひしますということでベルギー政府が頼みました。スクイテンさんがいろいろ考えてつくったベルギーパピリオンは、愛知万博の中ではなかなか出色の出来栄えだという評価を得ておりました。私も訪問しました。

これはまずベルギーが最も誇るもの、それはベルギーの絵画ですが、それをブリューゲルから始まってマグリットという画家の作品に至るまで、それに映像技術を施しまして平面的な絵画に奥行きをつけるようなイリュージョンを与えるということで、絵の前に

立つと自分もその中に呼び込まれるような幻想を持つというものをつくったわけです。この絵というのはベルギーが伝統的に得意としているわけですが、そもそも先ほどの観光ビデオでもちょっと出てきましたが、その一番のベルギーの誇りとする絵というのはこれです。これは15世紀ですから、ちょうどイタリアのルネッサンスと全く同時代ですね。イタリアからアルプスを越えてはるか離れた北のフランドル、フランダースで、当時では先端的な油絵をフランダース地方で開発しまして、ファン・アイク兄弟をはじめとする緻密な細部描写手法と相俟って今日でもこういう非常に鮮やかな色を維持できる描き方が発展したわけです。

これは聖バーフ教会のファン・アイクの「神秘の仔羊」という絵で、先ほど紹介がありましたゲントの町の大聖堂の中にあるんですけれども、私もゲントに行くと必ずといっていいほどこの絵を見に訪れました。私が最初に行ったのはもう40年近く前、そのときは教会の中で非常に暗かったんですが、今はそのところに絵の展示室があり、煌々と照らされていて、しかも日本語の解説もあるということで、1時間半、この絵の前にも飽きないという神秘的な絵であります。この15世紀、さらに16世紀、これはベルギー絵画の黄金時代で、この聖バーフ教会以外にも名作が生み出されております。

そういう伝統の絵画を万博の機会に展示したわけですが、それだけではないんです。実は昨年、日本でベルギー王立美術館の展覧会がございました。ここでも、万博で出たのは映像化されたものですが、こちらは本物を展示した同じブリュージュのイカロスの絵です、さらにはマグリッドの「光の帝国」といった世界の名作と言われるものを展示していました。その際に、この展示を挙行したベルギー王立美術館の館長さん、ドラゲさんとおっしゃいますけれども、彼がこの絵の展覧会に寄せた言葉を、皆様にちょっとここで引用してご紹介させていただきたいと思います。

「15世紀時代に我々の土地はヨーロッパの形成過程において主要な役割を果たしてきました。ベルギー、それはヨーロッパで開かれた十字路であり、国際的重要性を持った芸術の中心点。絶えず異なる文化との触れ合いによってそれが豊かになってきました。ラテンとゲルマン文化の間にあるベルギーは多文化共生がもたらす活力の証であり、5世紀にわたってグローバル化を日常のものとしてきました。共存すること、他者に耳を傾けること、武器をおだやかに放棄すること、他者を発見すること、そして最後混ぜ合わせるということといったやり方はあらゆる活動に通じています。この国の文化の特質となっています。ベルギー文化は、こうして『自分らしさを失わずに他者を受け入れる』ことで成り立って

きました。このような『自己』はやがて町を、地域を、そして国を特徴づけていきました。」

以上ですが、このドラゲ館長、私もよく存じ上げていますが、43歳。今ご披露した言葉は見事にベルギー文化の特徴、さらにはベルギー人らしさを要約していると思います。こういうまとめの中でさらに私がベルギーで3年間いろいろな体験をしてきたことについてご披露していきたいと思います。

先ほど愛知万博のことを申し上げましたけれども、そのベルギー館で絵画だけではありません、評判がよかったものが二つございました。それはビールとワッフルでした。ベルギーには地ビールというのがあることは、最近、だいぶ日本でも知られてきましたけれども、その数は200から400とも言われていまして、非常に個性的なビールが多くの土地土地で売られているわけです。

実はベルギーの人は大変な食通なんです。ところが、ラテン文化の非常に重要な要素であるワイン、これをつくるためにはベルギーよりもっと南の地方じゃないとつくれない、そこでワインに代わるものということでビールづくりに精を出したわけです。私自身はワイン党なもんですからそんなにビールは飲まなかったんですが、家内はベルギーのビールに惚れ込みまして、うんちくを語らせたら家内だけでも講演ができちゃうというぐらいなんですけれども、きょうは私の講演ですからその話は細かいところには入りませんが。ただ一つだけ申し上げておきたいと思いますが、今、世界一の規模のビール会社というのが実はベルギーの会社なんです。インベブと言うんですが。数も、それから種類もいろいろありますけれども、量的にも世界一なんだということを記憶にとどめておいていただきたいと思います。

それから先ほど申し上げたワッフルですが、万博のベルギー館では即売で、現場で焼いていてそのまま食べてくださいと。当時、私が訪問したときにベルギーの代表の方が1日に4,000個売れたと大変誇らしげに言っておられました。ベルギーはほかにもチョコレートがあるんですね。バレンタインデーが近づいてきますとベルギーのチョコレートがやはり一番高級なんだと、ここぞという人にはベルギーのチョコレートをということが言われておりますけれども。

ワッフルに限らず、ビールも個性があるということで、そういうものを食べている人、飲んでいる人が、このおいしいものを育て上げてくれるというわけですね。日本料理がおいしいのも日本人がそういう方面で非常にセンスが発達しているからこそ、つくる方も一生懸命になるという相乗効果があるわけで、ベルギーというのは、まさにおいしんぼの

国ということが言えると思います。

実はベルギーでいろいろなクラブ、組織がありますけれども、その中で一番メンバーになるのが難しいクラブというのが美食クラブと言われていまして、33人会というのがあります。33人しか正会員になれないんですね。何で33人かと言うと1933年に創立されて。ですからもう70年以上続いている会です。私は実は、先ほどマリクー大使がおっしゃっていた公邸でございますが、そこに33人会をお呼びして日本料理を味わっていただきました。日本料理は大変評判がいいものですから、私にも是非会のメンバーになってほしいということで、しかしベルギー人ではありませんから名誉会員ということで、名誉会員は7人なんですけどそのうちの一人として、今でも会員として扱っていただいております。

そこで、じゃあ、このクラブは何をしているのかということですが、別に寄り集まって食事をするのが仕事ではないんですね。このクラブは月に2回、ベルギーのレストランを借り切って試食会をやります。この33人が集まって食べて、そこで批評をするわけですね、このシェフの料理はどうだと。その中でいろいろな項目があるんですけども重要な項目が、この味に比べてこの値段は妥当かどうか、高過ぎるんじゃないかというように厳しく採点するのが非常に重要な点です。こういうこともあってか、ベルギーのレストランというのは味の割に安いと言われてまして、ヨーロッパの周りからも国境を越えて食べにきます。フランス料理というのはよく言われてますけれども、いろいろな料理をフランスで食べるよりも安くおいしく食べられるというのは、重要なベルギーの魅力だと思います。美術、その次は美食ということで、ベルギーの多様な美しい文化ということが言えると思います。

さらに、そういう意味でのフランスと似ているところはあるわけですが、私自身もフランスには2度滞在しました。フランスと比べて言えるのは、やはりベルギーの場合は肩の凝らない居心地のよさということが非常に印象づけられました。それで、食べるものにしても日常生活の中で手の届くところにいいものがあるということだと思います。

先ほどベルギーの政治的な危機の問題がありました。それもベルギーがヨーロッパの十字路ということで、ヨーロッパ列強の軍隊が何回も侵入してきたという歴史を背負っているわけです。有名なワテルローという戦場がありますけれども、このワテルローは何と首都ブラッセルのもう20キロ南なんですね。すぐそこで大戦争が行われています。

これは一つの例ですけれども、そのワテルローの主力はナポレオンという大軍隊、またウェリントンのイギリス、さらにプロシアの軍隊やオランダの軍隊、こういった形で全くの外国勢同士が自分たちの土地で戦をしているということで、ベルギーの人たちにしてみると、まずは身の回りを固めなければならないということがどうしても重要になってくるわけです。身の回り、もちろん家族に始まって、その次は地域社会ですね、村、町、さらにちょっと大きくなった都市、そういうところをきちっと固めていこうというのがベルギーの社会の非常に強い伝統になっています。それは日本で最近言っている地方自治ということですが、日本の場合は今、地方分権ということで中央から地方に政治が流れていますが、ベルギーはむしろ逆で、まず始めに地方分権がある、地方自治ということです。そのイメージとして、例えばベルギーではこういう田園風景の中で教会を中心に村がある。あるいは先ほども出ましたゲントの町の鐘楼ですけれども、この鐘楼一つ、いわゆる地方自治のシンボルなんです。それぞれの町があたかも競い合うかのように、こういう高い塔をつくっています。ゲントの町、さらに先ほど出ましたメッヘレンの町、それぞれ70メートルから90メートルの高さの塔、それぞれの自治のシンボルを町の中心につくっております。

そういう意味で日本と極めて対照的な国であるということが言えると思います。先ほど申し上げたように自然の国境がないものですから、外国の軍隊なども勝手気ままに入ってきてしまうということがある。まわりの国から見るとそういうことで地方自治を強く持っている。もちろん現在、国家という形でベルギーがありますが、ベルギーはそういう意味では地方自治国家。そのさらに先の、今はヨーロッパ連合という形で、それこそこういうヨーロッパの中で戦争をしてはならないということから始まったヨーロッパ連合ですけれども、まさしくベルギーは一番このヨーロッパ連合に国の運命を託していて、ヨーロッパ連合が一様に発展して、万が一ベルギーという国の存在が危なくなった場合は、もうそれ全体がヨーロッパ連合に溶け込んでしまえばいいと。ヨーロッパ連合とベルギーというのは極めて強い一体感があります。

さらにヨーロッパ連合ができる前で、ベルギーという国のなかった時代があります。それはブルゴーニュ公国であったり、さらにはオーストリアのハプスブルク帝国の一部であったり、ナポレオンの帝国の一部であったり、さらにはオランダの一部であると。最後にオランダから独立して1830年にベルギー王国になったわけですが、ですから1830年以前のベルギーという土地に住んでいた人たちにしてみれば、自分たちの国

というよりも自分たちの町のほうに帰属意識が強い訳です。そうなるとベルギーというのは極めて小さい世界という認識で、より広い世界で活躍するのが大前提といういわゆるグローバリゼーションというのがベルギーの人たちの伝統としてその当時から強く意識されています。

しかし、先ほどから申し上げているように、この地方自治、地域社会、そこではやはりそれぞれに文化がありますから、ローカルカラーという言葉で言われますけれども、それぞれに特徴のある伝統が生まれ、かつ、今でも生き生きと残っています。例えばこれはパンシュという町のカーニバルですけれども、人口3万人の町です。長い間の伝統でこれに参画する人たちは地元の人たち。さらに、もちろん100万の都市であるブラッセルにも伝統の祭りがありまして、これはオメガングというオーストリア・ハプスブルク帝国時代の宮廷絵巻、まあ、日本で言う時代祭のようなものです。グランプラスという舞台、これはまさしく当時の建物がここにあるわけですから、そういう本物の舞台で行われる長い間続いてきた伝統のお祭りということで、それぞれ継続しているというのが我々が時としてうらやましく思うところがあります。しかも、それぞれの地域社会の中で、出演者が出てきて「あ、だれだれちゃんがあそこに出てる。」というようなことを見つくと、これまたそこに見に来ている人たちにとっては親近感が湧きますし、おらが町のお祭りということを非常に大きなブラッセルという町でもしているということがあります。それが昔から続いている、この地域社会が現代にまで繋がっている、継続しているということが言えると思います。

この、継続しているというのは、やはり一人一人がその継続に参加している、親から子へ繋いでいるという、自分たちの身についた文化をそのままずっと発展させていく。その点、日本は西洋の文明を取り入れるという時代がありましたから、自分たちの伝統だけをそのまま継承していくというわけにはいかなかった。そこがヨーロッパとの違いですけれども、ベルギーもヨーロッパの一員として、この継続はしながらも常に現代カラーを出していくということが今日もなお、経済に活力がある所以だと思います。

先ほど私自身も実はベルギーの会社で仕事をしているというご紹介がありましたけれども、その会社はもともとは銅の鉱山の会社でした。今はそういった一次産業と言いますか、あらゆるマーケットで値段が上がり下がりしてしまいますから、それにつられて会社の株価も上がったり下がったりしてしまっただけでは困るので、そこから脱却して、たとえば銅からの副産物にコバルトという、いわゆるレアメタルが出ます。さらには亜鉛から出る

ゲルマニウムというのがあります。今、日本でもレアメタルというのが注目されています。そのレアメタルにハイテクを加えて産業として商品にしているんですが、そういうような、伝統の上に立った技術を現代にアダプトしていくというところが、この古い伝統のあるヨーロッパです。ベルギーにしてもこういう例があるように日々新たにしていくところに魅力があるということは、我々日本も伝統の中から何かしら学ぶところがあるのではないかと思います。

伝統というのは日常の中から生まれてくるものですから、あまり取ってつけたようなことではいけません。ということは、その手近なところで土壌を見るべきものがあるということが言えると思います。そういうところで街角をちょっと見てみますと、ブラッセルのグランプラスの近くに小便小僧というのがありますが、これがどうも有名な話で、町が外敵の侵略に直面したときに、この坊やがおしっこで町を救ってくれたという意味で建てたそうです。実はこれ噴水なんですけどね。噴水、これはブラッセルの市内の飲料水の供給設備の一つなんです。ちょっと私は個人的に抵抗感があるんですが、まあ、いずれにしても、アイデアとしては噴水ということでありまして、何でそういうことになったかということ、どうもヨーロッパ文明、これもその中に入ってるんですが、ギリシャに昔酒の神バッカスの文化というのがありまして、こういうスタイルがやっぱりバッカス流なんだそうです。そういうことを本に書いてありました。ですからただのいたずらではない、これもまた文化のあらわれということになります。

さらにブラッセルの町の中を歩いていますとアールヌーボーの建物がまだいっぱいあります。アールヌーボーは19世紀末期から20世紀始めにかけての、100年前の美術のスタイルですね。これは日本人の感性に極めて強く合っていて、私もブラッセルに越してきてほどなくアールヌーボーの建物を訪れました。これはまた別の建物ですけれどもいっぱいあります。この中に入るとこういう形の曲線を使って、さらには植物のデザインを使う、極めて日本人好みの建物があります。最近、日本のテレビのコマーシャルで、あるインテリア会社がこのブラッセルにあるアールヌーボーの建物の内部をバックグラウンドに使っているのを見まして、「ああ何と、やはり日本人好みだなあ。」ということを変更して納得したことがあります。

さらにこの身近ということからブラッセルのちょっと郊外に行きますと、これは先ほども申し上げたブリューゲルの絵画です。この絵は、ウィーンの美術館にあるそうですけれども、目の不自由な人たちが川に落ち込んでしまうところですが、この背景に教会があり

ますね、真ん中の上、右の上の方に。この教会、ですから400年前のものですが、ブラッセルからもう30分足らずの車で行ったところに今でもあるわけです。私も現場に行っ
てまいりましたけれども、これを先ほどの絵と比べていただいても全くその当時の教会で、
しかも案内のところにこの絵が置いてあります。この次にブラッセルへ行かれたときには
ちょっと足を伸ばせばこういう400年前の雰囲気に入れることができるということです。

いろいろ身近なところを巡ってまいりますといろいろなものがありまして、例えば最近
のベストセラーでダヴィンチ・コード、映画にもなりましたけれども、あの話の中に
レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」の絵が出てきまして、その中の描かれている
場面がそれが食べ物ナイフなのか、人を殺そうとしているナイフなのかという議論を、
それじゃ直接絵を見てと思ったんです。この本物の絵がミラノの教会の中にあるんですが、
私も何回か見に行きましたけれども、もう大変な世界の絵画ですから、のんびりしげしげ
と眺めることが許されないんですね。後ろの方を待たせてしまいますし。ところが、実は
その絵と全く同じサイズで同じ時代に、これはもう完全にレオナルド・ダ・ヴィンチでは
ないのですが複製画が描かれていまして、ベルギーにあるんです。ブラッセルから1時間
ちょっと自動車で行ったところに教会がありまして、そこに絵が展示されています。例の
「最後の晚餐」、それはもちろん複製ですから、絵の力というのは違うんですけれども、今
申し上げたようなダ・ヴィンチ・コード的な推理小説の世界で、このナイフが何なんだと
いうことをじっくりとつらつらと眺めようとすれば、この複製画は、もうほんとに
あっけらかんと教会の中に展示されてありますから近くでよく見ることができると。そう
いうのも、またちょっとした探偵気分が味わえるというところがあります。

まあ、先ほどから申し上げているのは、やはり日常生活の中にこの西洋文明のきらきら
したものが手近なところに転がっていると。転がっているというのは何ですが、そういう
ところがベルギーでの生活の全般的な魅力です。

先ほど申し上げた、肩の凝らない住み心地のよさ、居心地のよさというのは、やはり
なかなか外国では得られないものだと思います。いわゆる外国人を隣人として受け入れる
というのは、これはなかなか難しいものがあります。その点、私自身、外交官生活で
16年間、西ヨーロッパで生活しておりましたが、やはり何と言ってもベルギーが一番
溶け込みやすかったという印象を持っております。

溶け込みやすいということで、これは個人的な体験になりますけれども、ちょっと時間
がありますのでご披露したいと思いますが、ある地方へ家族でドライブしました。これは

ゲントの郊外、西の方にレイエ川という川が流れていまして、このあたりはほんとに風光明媚でかつ非常に静かな住宅地であり、その中にお城があるわけで、そこに訪問してきた息子を案内してドライブしていますと、私の車が故障してしまいました。これ以上進めますと車がほんとに壊れてしまうということで、もうドクターストップ。そうすると、日曜日の午後、車が止まってしまったわけです。しかも住宅街の真ん中ですからどこにいるかよくわからない。もちろんベルギーではオートモビルクラブというのがあります、電話一本でレッカー車が来てくれて、しかも同時に代わりの車も持ってきてくれると。自分の車はレッカー車で持っていかれて代用車で運転ができるというシステムがあるんです。しかし、どこにいるか分かりませんので、それをレッカー車のところに知らせる必要があるんですが、ちょうどその時止まった傍の門から車が出てきたものですから、その車を止めてドライバーの方に「レッカー車の方に知らせるので、ここの住所を教えてください。」と聞いて連絡しました。ですが日曜日の午後、そんなにすぐにレッカー車が来るわけもないもんですから、どうしたものかということだったんですが、待つしかしょうがないとなったときにですね、その門から出てきた車の家のご婦人が歩いてこられて、「うちでお茶でも飲んで待ちませんか。」ということをするんですね。もう私はたまたま通りすがりで車が故障して、勝手にその方の家の前に止めてレッカー車を待てる状態だったんですけれども、その家の方が非常に誠実な対応でありました。私の家内と子供だけがそれじゃあレッカー車が来るまでということでご好意に甘えてお茶をごちそうになりますということで行き、私は車で待つということでしたんですが、今度はその家の息子さんが出てこられて、「私も車が好きなのであなたの気持ちはよくわかるけれども、家の前でレッカー車が来ればすぐ分かるから、まあ家の中に入って待ちましょう。」というようなことで案内されました。

しかし、そのレッカー車が2時間たってもなかなか来ない。その間お茶をごちそうになっていたんですが、この家の親子の方がまったくご親切で、ちょうどお客さんもいらしたんですけれども、ほんとに私も普通の友だちが来たという感じでゆっくりとお茶をごちそうになって、そういう極めて親密な接待をしていただきました。さらに、レッカー車は来たんですが、今度は代わりの車が来ない。代わりの車が来なかったらどうしよう困ったなあ。そろそろ夕食の支度もしなくてはならない、しかしまあ幾ら何でもとお暇しようと思ったところに、その家の息子さんが「それではちょうどあなたの車が故障してせっかくのドライブが台なしになってしまったので、私の車でドライブに行き

ましよう。」ということで乗せていただきまして、メルセデスベンツのオープンカーで本当にドライブ気分で、おかげさまでオープンカーでドライブまでさせていただいたと。その後は、息子さんと「それじゃあ、村の酒場に行きましょう。」ということで、それこそ地ビールがありますけれども、その息子さんと村の酒場で地元の人達ともおしゃべりが出来ました。

私ども外交官というのは、外国に勤務していて最大のうれしいことは、この地元の人と仕事を離れておつき合いができる。日曜の夕方どこかの村の酒場でその地元の人に紹介してもらって、村の人たちとビールを片手に話をするというのが外交官として一番うれしいことなんです。幸いに夕食の直前に代車が来ていましたので夕食まではいただくに戻りましたけれども、私は極めて心を打たれた経験をしました。こういうベルギーの人の親切な心、これは私が日本で知っている日本人の方、ベルギーに住んでた方、ほとんど異口同音にですね、またベルギーに行きたい、リピーターですね、非常に惚れ込んでいるということは私一人の経験ではない、多くの日本人がそう感じていることだと思います。

今はひとつの紹介ですけれども、実はいろいろな体験がありました。先ほどのマリクー大使が当時はアジア局長、私は日本大使ということで、仕事の上で非常におつき合いがあったわけですが、ある日、連休の最中に命令がきまして、「大使よ、おまえはこれをベルギーの政府に伝えろ、ベルギーの政府から聞いてこい。」というのが来るんですね。ベルギーの連休と日本の休みは必ずしも一緒じゃないですから、例えば、昨日秋分の日祝日で日本はお休みでしたけれどもベルギーは休みではない。そういうことで、マリクー大使もベルギーから命令がきて日本の外務省に行っても閉まっていて仕事ができないということで苦労されたことがあったわけですが、そういう日にぶち当たったことがありまして、困ってしまっただけです。マリクー大使の携帯電話、これはめったに使ってはいけないことになっているんですけれども、電話をかけましたら繋がりました、彼いわく、「実は私は今自転車に乗っている。」ということなんですね。ベルギーの人は自転車が好きで、日曜日は大概みんな自転車ハイキングということで田園風景を楽しんでおられる。確かに電話口で風がびゅうびゅう吹いてるのが分かり、速いですから、その中で電話を受けていただいたんですが、自転車を置いて、それからじっくり話を聞くからということで話に乗っていただきました。これもまたご親切で非常に心を打たれた出来事でした。自転車をこぎながらマリクー大使は仕事の話をしてくれまして、とにかく今お答えしましょうということで言っていただきました。マリクー大使もベルギー人の一人、

先ほどのゲント郊外のご家族もベルギーの人たち、そういう形で多くのベルギーの人たちはそういう人たちなんですね。

ということで、先ほどのミッシェル・ドラゲさんの、他者とのつき合いということに気を配ってきたベルギーの伝統というのは、現代のベルギー人がそのまま実行しておられるということが言えます。それを表現するのにいろいろな言葉があります。やはり寛大である、それは、まずは近所づき合いから始まるわけですが、先ほども申しましたブルージュのベギン会修道院、このベギン会というのは、中世にさかのぼるんですけども、一言で言いますと中世十字軍でご主人が遠くへ出征しちゃったと、そこで残されたご婦人たちの女性組織ということで、女性だけの集合住宅に集まって暮らしていたと。今はもう修道院という形になっていますけれども、そのベギン会は、そういう神に対して純潔を誓うという精神があったわけではなくて、一時入っていて、それでまた出てくるのも自由だということで、住む場所としてということがあります。未亡人あるいは独身の女性、家族がいても一人身の女性。ですから場合によっては駆け込み寺のような役割もあったようですけれども、ひとつの女性解放の非常に早い段階の制度だったということが言えると思いますが、そこでもこれは共同生活ということでやっておられたわけです。共同生活という、それがさらに、ひいては私どものような外国人と共に暮らす。ベルギーはヨーロッパではこう言われているそうです。亡命するならベルギーへと。要するに自分の国で居たたまれなくなった人が温かく迎えてもらえるのがベルギーだということで、ヨーロッパの中でも定評のある寛容な人たちが住んでる国、それがベルギーということだと思います。

そういうベルギーの人たち、さらにいろんな側面がありますけれども、受け入れるということはあまり我を張らないということで、謙虚で押しつけがましくないということ。それから同時に列強からいろいろと侵略を受けたということで苦労しておられます。苦労するプロセスで、やはり言葉ですね。いろいろな国の言葉を話してこられて、相手が何をしゃべるかわからないということで非常に多くの国の言葉を皆さん話されます。ベルギーの国内、南北問題というのはオランダ語とフランス語ですけども、そのほかにもドイツとの国境付近にドイツ語の地域というのがあります。全体で人口7万人程度ですけども、ここはドイツ語の文化を持っている。しかしベルギーの人たちはそれだけではありません。例えば私が勤める会社の取締役会は、英語で話します。それから株主総会では、社長、会長、重役いずれも説明しているときにはオランダ語で始めてフランス語に変わって

フランス語からオランダ語に、もう自由自在に。それから現在、政府が連立交渉をして苦勞していますけれども、首相になる人は当然、国会で答弁に立つわけなんですね。オランダ語の質問に対してはオランダ語で答弁でき、フランス語の質問に対してはフランス語で答弁、ドイツ語の質問に対してはドイツ語で答弁、加えてヨーロッパ連合では英語もほしいと。さらには、スペイン語、イタリア語。

実はベルギーには日本の企業が増えています。そこで多くの企業はベルギーにヨーロッパ本部を設置しております。ドイツが多いですけれども次第に多くの企業がヨーロッパ本部をベルギーに。日本人の現地支社の社長さんがよく言われるんですが、ヨーロッパのほかの国との調整役としてはやはりベルギー人が一番だと。自分の我を張らないのでいろいろな動きをうまくまとめられるということで、ただ機能的だけではない、人の価値も加えてやはりベルギーにヨーロッパ本部を置く意味があるのだということを言っておられます。

ベルギーの魅力は何かというと、もう皆さん理解しておられると思いますが、やはり“ベルギーの人々”というところではないかと私は思います。ベルギーという地に住んで、長い間その伝統文化を育ててきた、それは絵画という作品もありますが、しかし一番重要なのは現在の世界で活力を持って生きていくと同時に、生活していく中で外国の人たちとも仲よく暮らして、温かく迎えてくれる、こういう人たちの中で生活できたというのは大変楽しい3年間でした。そろそろ時間でございますから。長い間ご静聴ありがとうございました。